

地域の社会活動に関わった 高校生の生活と認識世界

祭礼行事を担う青年団の活動を中心に

尾 場 友 和

1. はじめに
2. 調査の概要
3. 青年団に入団するきっかけ
4. 青年団での生活
5. 学校での生活
6. おわりに

1. はじめに

本稿の目的は、高校時代に地域の祭礼行事を担う青年団に所属していた若者へのインタビュー調査から、彼らが当時の生活や地元青年団に対しどのような認識をしているのか、明らかにすることにある。

祭礼は、神事などの宗教的な側面だけでなく、様々な潜在的機能を内包しながら営まれる（芦田1996）。そこでの機能には、独自文化を持つ自己のアイデンティティの構築（和崎1996）や社会関係資本（武田2016）などがあり、祭礼はそれを担う一人ひとりの日常生活と密接に結びついている。特に武田（2016）は、祭礼の執行に必要な資金の調達において、若衆が仕事や生活上のネットワークと祭礼の担い手としての役割を結びつけ、社会関係資本と顕意識との絡み合いにより、資金調達が可能になっていることを指摘し、祭礼が彼らの日常と地続きであることを示唆している。

こうした祭礼と日常との結びつきは、中野（2007）のライフヒストリー研究に見られるように、個人の社会生活だけでなくその後の人生にまで継続する。このような祭礼とそれを担う個人の関係に着目したとき、ブルデュー（P.Bourdieu）のいうハビトゥス（habitus）の概念が有用に思われる。ハビトゥスとは、社会化過程において習得したり身につけたりするものの見方や感じ方、振舞い方などの性向を指し、学習や言語、社会的な交際などの行動において大きな役割を果たす¹⁾。それゆえ地元の祭礼にかかわる青年団を経験した高校生が、どのようなハビトゥスを身につけ学校生活を送ったのか検討することは、地元の社会的文脈

1) ハビトゥスの概念を具体的に理解するための事例として、イギリスの社会学者 Willis.P.(1977=1996) の研究がある。そこでは、労働者の階級文化を価値規範化した子どもがいかにして労働者階級の職業を選ぶのか、が示されており、帰属集団で共有される価値規範と社会化の関係性が論じられている。

が彼らの学校生活やその後の進路とどのように関連しているのか議論していく上で、示唆的であると考えられる。

そこで次節以降では、祭礼を担うある青年団に所属する若者のインタビュー調査の概要(2節)を示した後、彼らが青年団に入るきっかけ(3節)や青年団での生活経験(4節)を検討する。さらに、そうした経験と学校生活との関係について彼らの認識世界(5節)を提示し、彼らのリアルな生活経験を記述＝解釈していく。

2. 調査の概要

調査は、大阪府南部地域にあるX市Z青年団で行った。大阪南部地域では、毎年9月から11月にかけて地車を曳く祭礼行事があり、X市でも複数の地区で行われている。そうした祭礼行事は、X市すべての町内で行われるわけではないが、市の広報誌(2016年)が公表する市内の地車数と町内(自治)会数から算出すると、市内の約半数(52.6%)の町や自治会に地車があり、地域の祭礼行事が人々の生活の中へ浸透していると推測できる。

祭礼行事の運営は、町内会を中心に行われ、年齢階層ごとに分けられた町内会内部の集団により様々な役割が割り当てられる。調査対象とする青年団は、そうした町内会組織の最下部にあり、高校1年生から20代半ばまでの男子が所属している。こうした町内会の活動は、祭礼行事だけでない。町内会は、地域の清掃活動や防犯パトロール、高齢者の生活支援、子ども会など、地区の自治に関わる様々な活動を運営し、青年団もそうした活動に参加している。

さて、調査は2016年10月～12月にかけて青年団に調査依頼し、協力の同意が得られた青年団員(以下、団員)5名2組を対象にグループインタビューを行った。協力者のプロフィールは、表1のようになる。Tさん、Sさん、Dさん、Kさん、Mさん、Iさん、Pさんは、地区内の中学校を卒業し、祭礼行事が盛んな大阪南部地域の高校に進学している。Jさんは、地区内の中学校を卒業し、進学指導に力を入れる地域外の高校に進学している。Nさん、Oさんは地区外の中学校出身だが地域内にある高校に進学している。このように協力者

表1 調査協力者のプロフィール

	出身中学	出身高校	高校所在地	高卒後の進路
Jさん	地区内	普通科	地域外	大学
Nさん	地区外	専門科	地域内	就職
Tさん	地区内	普通科	地域内	大学
Sさん	地区内	総合学科	地域内	専門学校
Dさん	地区内	普通科	地域内	大学
Kさん	地区内	総合学科	地域内	大学
Mさん	地区内	普通科	地域内	就職
Oさん	地区外	普通科	地域内	大学
Iさん	地区内	専門科	地域内	就職
Pさん	地区内	普通科	地域内	大学

の出身地区や高校経験は様々であるが、彼らは青年団に入って高校生活を過ごしたという共通の経験を持っている。

以下では、彼らが青年団入団への経緯や活動を続けながら送った学校生活の状況について検討していく。なお、語りについては読みやすさを考慮し修正を加えている。

３．青年団に入団するきっかけ

まずは、彼らが入団するきっかけについて整理する。Ｚ青年団にかかわる活動は、先に見たように祭礼行事だけでなく地区での日常生活における様々な場面にも関わっている。それゆえ筆者は、青年団の入団にあたっては地縁の有無により決定されと考えていたが、表１のようにＺ青年団には、地区外出身者もいる。そこで筆者は、協力者にどのような経緯により青年団へ入団したのかを尋ねたところ、彼らは次のように語った。

＊：小さい頃からやっていたんですか？

Ｊ：そうですね。

Ｎ：親がここでやりましたからね。

Ｊ：親がやってますよね。

（全員、うなずく）

＊：となると、ここで集まって参加するのは自然な流れ？

Ｊ：やるのは、中学生の時に（地車を）曳いてて、高校生になったときに、青年団に入るかという選択があって、「祭り、楽しいです」みたいな感じで、「そんなら入り」ていうことになって、それだけのことです。

（2016年10月2日）

こうした語りにあるように、彼らは親の世代から町内会に関わり、幼い頃から祭礼行事に参加していた。それは、「親がここでやりましたからね」「親がやってますよね」のように、親世代の経験を子どもが引き継ぎ入団するかのようであった。しかも、そうした町内との関係は町内を離れた後も続いている。例えば、Ｎさんの居住地は町内から数キロ離れたところにあるが、それでも元にいた町内の活動に参加している。このように町内会への参加は、地縁をベースとしながらも、彼らは町内との何らかのつながりにより参加の機会を得ていた²⁾。

しかし、そうした幼い頃の経験を経たとしても、青年団に入団するかどうかは個人の選択により行われる。それはＪさんの語りの「高校生になったときに、青年団に入るかという選択があって、「祭り楽しいです」みたいな感じで、「そんなら入り」ていうことになって、それだけのことです」とあるように、それまで親がかかわっていた町内会の活動に対し、彼ら

2) 例えば、吉田竜司（2010）が、少子化などの影響により困難になりつつある祭礼行事を維持するため、祭礼日程が異なる他の地区から人員の貸し借りの仕組みを紹介するように、それがきっかけとなり参加する場合もある。

は慣習的なしがらみにより入団するのではなく、自らの意思と判断により入団を決定していた。

では、青年団が関わる祭礼行事以外の活動に対し、彼らはどのように認識しているのだろうか。そこで筆者は、彼らが経験した非団員(＝中学生)の活動と団員の活動の違いについて尋ねることにした。この点について、協力者は次のように語った。

T：青年団に入ったら、なんか、普段とかでも集まりとかがあるし、祭りするにあたって、青年団とそれまでとは全然違いますよね。

N：中学生は当日だけやからね。

*：青年団は今日(町内の地域活動日)みたいな時も？

全員：そうですね。

J：高校1年生が一番下で、中学生とかは入っていませんからね。

D：やっぱり、俺らは曳くもんな。中学生は周りを楽しく走ってぱかりっていうか…。

J：青年団に入ったら本気になって1年中祭りのことをやるみたいな感じで。中学生も祭りはやるんですけど、それは祭りの時だけっていう感じなんで。(中略)僕ら、本気度っていうか、1年、こうしてやってきた結晶みたいな感じじゃないですか。やっぱりその分、賭けるものっていうか、かかる負担とかも全然違いますしね。

(全員、うなずく)

(2016年10月2日)

こうした語りから、彼らは青年団における町内でのあらゆる活動を祭礼行事と結び付けて解釈し、祭りへの意気込みが祭礼の当日しか関わらない中学生とは全然違うと認識していた。それは、「青年団に入ったら、なんか、普段とかでも集まりとかがある」のような費やす時間の違いだけでなく、「青年団に入ったら本気になって1年中祭りのことをやるみたいな感じで。(中略)僕ら、本気度っていうか、1年、こうしてやってきた結晶みたいな感じじゃないですか。やっぱりその分、賭けるものっていうか、かかる負担とかも全然違いますしね。」のように、祭礼行事に対する精神的な思い入れの違いを強調し解釈していた。

こうして青年団に入団する彼らは、高校生として地域の活動にコミットしていく。そこで活動は、彼らの日常生活に対しどのように組み込まれ、構成されているのだろうか。次に、青年団での生活について検討する。

4．青年団での生活

青年団の活動は、平日の夕方から夜にかけてや日曜日などに行われる。そこでは、祭礼行事や地域の活動に関する準備をするだけでなく、寄り合いがあり、団員間の交流が頻繁に行われる。団員の日頃の生活は、協力者がそうであるように高校生だけでなく大学生や職業人

など多様であり、彼らのライフステージも既婚者がいるなど様々である。そこで筆者は、そうした青年団の人間関係を通じて、彼らがどのような生活を経験しているのか尋ねるなかで、彼らは次のように語った。

*：みんな青年団の人は優しい人？

D：優しい人もあれば、厳しい人も、はい、います。

*：合う合わないはあるわな。人間関係やし。で、どんなことで怒られたりするの？

T：厳しい人にはもう理解できないですよ（笑）

*：でも、いろいろと教えてくれるんやろ？

S：やっぱり綱のこととか、そこで引いてるときのこととかで（事故を防ぐために）怒られたり。

*：礼儀とかも？

T：やっぱりそれは大きいですね。まだ学生なんですけれど。やっぱり、みんな知らないんですよ。やっぱり上の人に無礼とにならないようにいろいろと教えてもらえますね。

（2016年10月2日）

このように、彼らは青年団での祭礼行事における技術の伝承やそこでの振る舞い方を通じて、その町内会での生き方を身につけていく。それは、「やっぱり綱のこととか、そこで引いてるときのこととかで怒られたり」といった、祭礼時の具体的な手順だけでなく、「まだ学生なんですけれど。やっぱり、みんな知らないんですよ。やっぱり上の人に無礼とにならないようにいろいろと教えてもらえますね。」のように、学校などのフォーマルな教育では教えてもらえないようなマナーも伝達されている。その過程では、「厳しい人にはもう理解できないですよ（笑）」のように、理不尽に感じることを含みながらも、そこでの生き方を知り、自らの経験を肯定的に解釈していた³⁾。

だが、彼らの活動は学校の授業時間と重ならないものの、放課後や休日が活動のメインとなる部活動のような学校の活動において、両立困難な場面があると推測される。そこで筆者は、青年団と学校の活動が干渉する場面について尋ねることにした。協力者は、青年団に入団する意志があったにもかかわらず入団しなかった友人や自分自身の事例をあげながら、そこでの事情について次のように語った。

J：部活とかで続けるかどうかや、（中略）仕方なく青年団をやめたり、中学校まで祭り好きやったけれど、入団をやめるっていう人はいたりしますよね。

*：それは友達とかで？

J：はい。中学校までは曳いていたけれど、自分のやりたいことがあるから青年団をやめとくっていうのはありますけれどね。

3) そうして彼らは、青年団で経験したさまざまな事柄を身体化していく。例えば、青年団での飲み会では年長者が会計を全額支払う慣習になっており、大学のゼミの飲み会で教員が全額支払わなかったことに違和感を感じた、という語りもあった（教員が数倍の金額を支払っているにもかかわらず、である）。

(2016年10月2日)

*：その部活と祭りとの両立の関係は？

○：んー。まあ、でも正直は、祭りにというか、寄り合いに行けて無い時がやっぱり多かったですね。

*：行かれへんかったらやっぱマズいんですか？

○：まあマズいというか、祭りは祭りでやっぱりこうなんて言うんですかね、あるじゃないですか、来てる来てないとか、まあそういう社会の一種なんすけど。そんなんやっぱありますよね。こっちは見られ方というか。だから難しいですね。

*：ある意味その祭りをとるか部活をとるか、ってというようなジレンマ・・・

○：それはでもすごい考えましたね。

(2016年12月18日)

こうした語りにあるように、彼らは青年団の活動と学校の課外活動である部活動が両立し難しいものと捉え、相互に干渉し合う関係だと認識している。それは、「部活とかで続けるかどうかや、(中略)仕方なく青年団をやめたり、中学校まで祭り好きやったけれど、入団をやめるっていう人はいたりします」のように、一度入団したが部活動を選択する、あるいはそうした課題を予め回避するため入団しないなど、青年団の生活は部活動をしたい高校生にとって相性が悪いようである。また、部活動と青年団の両方に参加していた○さんが語る「来てる来てないとか、まあそういう社会の一種なんすけど。そんなんやっぱありますよね。こっちは見られ方というか。だから難しいですね」のように、彼らは青年団の寄り合いに出席できないことによる具体的な活動経験の機会喪失というよりはむしろ、青年団社会における他のメンバーからの眼差しに神経をとがらせ、そのことを負担に感じていた。

このように彼らは、部活動との葛藤を感じながら青年団の生活にのめり込み、祭礼行事の手順や様々な礼儀を身につけていく。では、彼らはそうした青年団活動の対となる日常生活、すなわち彼らの高校生活はどのようになっているのだろうか。次に彼らの学校での様子について見ていくことにする。

5. 学校での生活

これまでの先行研究では、青年団の生活は、教育的な価値観との間に一定の距離があると指摘されてきた。野中(2007)によれば、かつて保護者の間には、青年団を「大人の嗜み」(喫煙・飲酒)と接する場と捉え、子どもを青年団から遠ざけようとする思いがあったという。そうした野中の報告から推測すれば、青年団における文化は学校的な価値と相容れない部分があり、彼らにとって学校生活への適応に支障を来す場面があるかもしれない。そこで筆者は、協力者に日常の学校生活と青年団活動との関連について尋ねることにした。その中で、協力者は高校時代の友人を思い浮かべながら、祭礼に関わる青年団の活動が学習に負荷を与えている印象を次のように語った。

J：（祭礼が学習の阻害要因になるということ）そういう風に見られてるのは多分あると思いますよ。その、祭りばかりでみたいなそういうのは多分無くはない。

*：（関係）ある？

T：疲れますもんね。（祭礼前の時期は）暑いし。

*：確かに（練習で）歩くもんな、ダッシュしたり。ダッシュちゅうか、そんなんしたりするんやろ？。

T：時間取られたり、疲れて学校で寝たりもしますし。そういうところを見られてるんちゃうかな、と思います。どうしてもあかん（眠たい）時は、あの、祭りのせいにされたくないと思っててもあかん。けど、だからって、別にその後を適当にするんじゃないくて、ちゃんと取返しには行くかな。「悪いノート見してくれ」って言って全部写したり。

J：スイッチは作ってましたね。なんか自分が勉強したい授業じゃない授業で寝るっていう。勉強したいのは、数学とか化学とか好きやったんで、その授業は起きてたいから、他のを犠牲にする。みたいな。その時間を潰すわけにはいかんっていう自分のスイッチは作ってましたね。

（2016年10月2日）

ここでの語りから、祭礼前では祭り準備が彼らの生活の中心となり、彼らは授業をまともに受けられないほど疲労が蓄積した状態になるようである。それは、「時間取られたり、疲れて学校で寝たりもします」のように、彼らは学校中心の生活が送れず、「なんか自分が勉強したい授業じゃない授業で寝る」のような逸脱的な態度で授業を受けていることがわかる。しかし彼らは、「祭りのせいにされたくない」のように、「自分のスイッチ」を作りメリハリをつけながらなんとか学校生活を送っていた。

こうした彼らの生活からは、本稿が取り上げた祭礼を指す「ラテン大阪の祭」（江2005；奥付）から連想されるような情熱的なものではなく、むしろ青年団と学校を往還しながら日常の生活時間をやり繰りしようとする若者の姿が浮かび上がってくる。そうした経験を経て、彼らは、地域の文脈を解釈し、それに寄り添いながら地域の担い手として大人になっていくのであろう。

6．おわりに

以上のように、本稿では青年団に所属する若者のインタビュー調査から、彼らが高校生の時に経験した青年団の生活と学校生活がどのようなものであったかのかを検討してきた。その結果、次の3点が明らかになった。

第一に、青年団への加入は、親世代から続く地区とのかかわりがきっかけとなるものの、最終的な決定は彼らの判断に任されていた。つまり、彼らは地縁の呪縛により、社会活動をしているのではなく、自らの主体的な意志により参加を決意しているのである。第二に、彼らの青年団での生活は、祭礼行事の運営の仕方だけでなく学校では学べないような礼儀につ

いても伝達され、彼らはそのことを肯定的に受け止めていた。その過程では、団員間での様々な交流があり、そこへの参加が、時として彼らの負担となっていた。第三に、そうした青年団の生活は、学校生活と時として両立し難いこともあるのだが、彼らは「自分のスイッチ」により意識を切り替え行動しようとしていた。こうした彼らの実践は、祭りにともなう楽観的なイメージではなく、地域の文脈に沿いながら展開する、彼らなりの社会化過程と捉えることができるだろう。

こうした彼らの日常世界への接近は、これまで高校生を研究していく際の中心的な視点であった学校的な価値による理解ではなく、彼らの生活の相対的な全体像の浮上を可能にしている。すなわち、本稿で見たように彼らが学校で見せる姿は、必ずしも向学校的ではないが、そこには彼らが学校外で経験する地域の様々な社会的文脈があり、彼らの行動の背景は、そうした関係性の中で紡がれている。それゆえに、彼らの生活地域の活動に着目した本研究は、高校生が何を身につけどのような世界を生きているのか、への理解において、地域社会という変数を組み入れた分析の重要性を示唆できたように思われる。

しかしながら本稿では、青年団活動の活動を担いながら、彼らがどのように自らの職業的キャリアを形成していったかについては射程に入れることができなかった。この点については引き続き調査を行い、これからの課題としたい。

【謝辞】

研究協力いただいたZ青年団の皆さんに感謝を申し上げます。

【追記】

本研究はJSPS 科研費16H07348による成果の一部である。

参考文献

- 芦田徹郎「現代都市祭礼のアイロニー 祭りの不可避性と不可能性をめぐって」『宗教と社会』4, 1996年, pp. 99-106
- 江弘毅『岸和田だんじり祭 だんじり若頭日記』昌文社2005年
- 中野紀和『小倉祇園太鼓の都市人類学 記憶・場所・身体』古今書院 2007年
- 野中亮「「鳳だんじり祭り」の概要と課題 伝統的祭礼の近代化と地域組織の変容」『大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要』6, 2007年, pp. 155-177
- Pierre, Bourdieu, 1977, *Algérie 60: structures économiques et structures temporelles*, Minuit, (1993, 原山哲訳『資本主義のハビトゥス』藤原書店).
- 武田俊輔「都市祭礼における社会関係資本の活用と顕示 長浜曳山祭における若衆たちの資金調達プロセスを手がかりとして」『フォーラム現代社会学』15, 2016年, pp. 18-31
- 和崎春日『大文字の都市人類学的研究』刀水書房1996年
- Willis, P, 1977, *Learning to Labour; How Working Class Boys Get Working Class Jobs*, Ashgate Publishing Limited, (1996, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』筑摩書房).
- 吉田竜司「伝統祭礼の維持問題-岸和田だんじり祭における弾き手の周流と祭礼文化圏」『龍谷大学社会学部紀要』第37号, 2010年, pp29-47